

## 電線と電信柱

札幌駅前からススキノへ向けて車を走らせていて、途中大通り公園を過ぎるあたりで、ふと気が付いた。「電線が張ってないなあ」

電線の地中化は都市景観の成熟度のバロメーターとも云われているが、かつての札幌駅前通りは架線の見本市みたいなものだった。

両側の商店に引き込む電灯線、街路灯用の電線、電話ケーブル、街頭放送用ケーブル、交通信号用の電線、それに、駅前通りを走っていた電車のための電線とその線を支える綱目のようなワイヤー。そして、この沢山のケーブル類を支えるために道端に立っていた木や鉄やコンクリートの柱類。

今あるのはシャレた形の街路灯と、交通信号や交通標識の柱だけだが、かつては、おびたしいと云って良いほどの架線と柱が駅前通りの中空と道端に、はびこっていたわけだ。

もし、それが今も残っていたら、たぶん昨年の秋のファイターズ優勝パレードも、紙吹雪が架線ネットに引っかかるせいで、オーケーにならなかっただろう。

今、大通りからススキノまでの間で、駅前通りを横切っている架線は、私が眺めて気付いたのでは四丁目十字街に二本(これは電車用の架線を支えるワイヤーなのか)と狸小路のアーケードを結ぶ、いくらか太目のケーブルだけ。昔に比べれば全くすっきりしたものだった。

無粋な架線と柱はいつ姿を消したのだろう。駅前通りでいえば、やはり札幌オリンピックがきっかけだ。地下鉄の建設で役割りを終えた市電が消えた事で、架線ネットが不要になり、また、ビル化が進み、昔どおりの電柱から電気を引き込む程度では電力が不足するため地下ケーブル化され、シャレた街路灯に電線が張りめぐらされているのは不格好と、これも電線が地中にもぐり、という工合になっていった。

そう考えるとオリンピックの開催は札幌の街の姿を変えたと云い切ることもできそうだ。

今電線の地中化は駅前通りばかりではない。札幌の街の中心部は当然だし、地域の主だった商店街みな架線は消えている。電線が残っているのは住宅地だけだ。

それで又、ふと気になった。電柱が木製からコンクリート製に変わったのは、いつ頃からだろう。昔の木製の電柱は腐敗止めのために、強い臭いのするコールドタルが塗ってあって、何年たっても、小さなかたまりをつまむと、ベタリと指についたりしたものだ。

私の知っている現存の木製の柱は一本だけ。地下鉄発寒南駅の近くにあるのだが、なぜか電線が繋がっていないのだ。